

小柴先生

先生の受賞に対し心からのお祝いを申し上げます。

先生が「ニュートリノ天文学」という新しい学問分野を創成された事に対する当然の評価であると考えます。ニュートリノは弱い相互作用しかしないので受賞が遅れたというのが研究者の間でのもっぱらのうわさです。

1987年2月、16万光年のかなたにある大マゼラン星雲の超新星1987Aの大爆発が生じ、そこからのニュートリノを、先生が考案されたKamiokande測定器が捉えました。それは小柴先生が東大を退官されるわずか一ヶ月前のことであり、先生がこのような「幸運」を呼び込まれたことは我々には大変な驚きでした。あたかも、宇宙が先生の直観力に屈して、16万年後の退官にまにあうように時空を超えて爆発のタイミングを微調整したかの如くに見えました。

その後神岡での実験はSuper Kamiokandeへと発展し、大気ニュートリノと太陽ニュートリノの観測によりニュートリノが質量を持つことを発見するなど、さらに多くの成果を生み出しました。

一方先生は、1960年代のおわりから、当時は海のものとも山のものともわからなかった高エネルギーの電子・陽電子衝突実験の重要性を直観的に見抜き、その道の大家であったブトケル教授をロシアのノボシビルスクに訪ねられました。

1974年には海外において国際協力で電子・陽電子衝突実験を行なうため本センターの前身である高エネルギー実験施設を新設されました。これが、先生や故折戸周治教授の努力によりドイツの電子シンクロトロン研究所(DESY)におけるDASP, JADEの国際協力実験、さらにCERNにおけるOPAL実験へと発展しました。これらエネルギーフロンティアにおける一連の実験では、グルーオンの発見、素粒子の世代数の決定など多くの成果をもたらしました。先生が開拓されたこの道は、現在CERNで建設中の加速器LHCを用いたATLAS実験、そして我国での建設を目指している国際プロジェクト電子・陽電子リニアコライダーJLCへとさらに大きく発展しております。

先生は学生や若い研究者に対して、「将来大きく育つかもしれないアイデアのタマゴをいくつかかかえてあたためておけ。そして、タマゴを時々取り出して、機が熟したかどうか気をつけていなさい」という事をよく言っておられました。先生のかかえられていたタマゴはいくつも孵化して、大きな学問へと成長しました。

これからもお元気で、御指導くださります様お願い申し上げます。

東京大学 素粒子物理国際研究センター長
駒宮 幸男